

武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2022.05.02 No.14



第 16 回武庫川臨床教育研究大会が終了。45 人の参加をいただきました。

2月20日（日）、今回は完全オンライン大会となりましたが、45人の参加を得て、参加されたみなさん、理事・事務局全員の協力で第16回研究大会をスムーズに開催することができました。たくさんの参加、ありがとうございました。

9本の自由研究発表報告と、二つのシンポジウムと充実した内容でした。気軽に発表ができ、話し合いの場の時間保障を確保できたこと、分科会の充実、実践の交流（大学教員の悩みを語る）など、この学会ならではの意義が確かめられたと思います。今後、さらに研究の中身や討論を深めていくための方法を模索したいと思います。また、研究大会やコロナ禍の課題をどう深めるかなどの感想も寄せられました。いくつかを紹介します。

◆ 3名による充実した発表内容はとても刺激に富むもので、現状の対人援助職養成課程が直面する課題を扱っていると感じました。シンポジウムについても、多様な切り口による視点からの話題提供は、コロナ禍にある現場に根差したまさに臨床的と言える内容であったと思います。

◆ 発達援助の場に生きる一人ひとりへの理解と専門性の問い直しという、武庫川臨床教育学会の意義を全体として感じることであったと思います。ありがとうございました。（私自身の発表がそこまで至らなかったため、今後頑張っていきます。）

ハイブリッド型やオンラインのみの開催が今後も続くとなれば、とりまとめをどうするかという問題もあるかと思いますが、チャット機能を使うなどして、参加者が気軽に声を発することができ、聴くだけではない満足感をプラスできることも考えられればと思いました。

武庫川臨床教育学会
<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558
兵庫県西宮市池開町 6-46
武庫川女子大学教育研究所内

電話番号：準備中（連絡はメールをお願いします）
メール：mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

◆ シンポジウムⅡ。田中昌弥さんの講演はパワポ資料なども準備いただいてわかりやすくかつ刺激的でした。講演記録の集録を読み直すのが楽しみです。

◆ 第二分科会に参加させていただきました。福祉系の援助職養成に関わる教員の葛藤や学生の悩みやモチベーションを如何に導き出せるかがよく理解できる発表で、自身の見直しができるよい機会でありました。

◆ シンポジウムにおいては、シンポジストの一人として参加させていただきましたが、自身の発表報告はコロナ禍にあって、現場の職員の今まで経験もしたことない経験や苦悩、それと利用者への支援者のアクセスが難しい状況をどのように対応していくべきかの状況をもう少し伝えればと反省しております。

講演については正直、自身の勉強不足でもありますがナラティブ・アプローチについて我が勉強不足を恥じる次第で、難しかった印象です。機会があれば初歩から学んでいきたいと思えます。

◆ 自由研究発表については、自身も発表させていただきましたが、Zoom 環境等物的には皆さん慣れてこられていると思うので、不安に感じていたような混乱はなく、安心しました。

ただ、場の雰囲気共有しながら質疑応答や議論を深めていくことは Zoom では限界があり、対面でできれば議論が深まったろうと思えます。

◆ シンポジウムⅠ・・・コロナ禍での大学教員の大学教育への模索が提起され、それに伴う指定発言があり、現場と照らし自分の取り組みを振り返る機会となった。時間的に、1 時間 30 分で 5 人の発言となり各自の提案発言に終わり、臨床教育学としてそれをどうとらえるかは、今後の各自の研究としての問題提起となったように感じた。時間配分についての課題が残るのでは。

◆ 自由研究発表第一分科会は予定通り 3 本の発表がありそれぞれに興味深い報告でした。それぞれの報告で議論の手掛かりになる言葉があり、「不良性の除去」「トラブル回避」「内面の解放」それを、生活から子ども理解と発達援助実践ということで繋いで議論できたと思えます。

◆ パワーポイント資料により丁寧に説明いただき、大変分かりやすく勉強になった。「正解のない課題を共に主体として考え、生きる経験→個人の問題を語ることから社会の問題を可視化していく」「真理性・真実性をどのように担保するか」ということ他、等々、今じっくり考えています。

新しい会員が増えました

佐藤奈美さん、奥川純子さん、藤原直子さん、藤原実沙さん、團野理恵さん、松島英恵さん、西田淳子さん（7 人は今春の武庫川女子大学大学院修了生）、大北理津子さん（武庫川女子大学大学院生）が入会されました。

総会でいくつかのことが確認されました

1. 今後の体制について

基本は、年 1 回の研究大会、機関紙の発行、ニュースレターの年 4 回発行、3 つの学習会、定例の事務局・理事会を継続し、確立していくことです。今夏は第 7 期の役員選挙がありますが、現在の理事・事務局メンバーで、次期役員の方々に活動が継続していただける方向性を打ち出したいと思っています。上田会長が退任されるため、活動が停滞せぬよう現実的選択を考案していきます。

2. 3 つの学習会の具体化

年1回以上の開催 10人規模の参加組織を考え、3つの分野の調整を考えます。

臨床教育学の原点をさぐっていきたいと思います。会員で発表、問題提起希望の方は事務局まで遠慮なく連絡ください。神出学園視察、関西学院大学・流通科学大学・花園大学の視察などのフィールドワークも検討中です。

3. 臨床教育学論集第14号の発行予定

特集1はコロナ禍の今と臨床教育学(仮題)、特集2は第16回大会特集や図書紹介などを軸にします。発行予定は12月です。投稿論文については、現在、査読中です。

4. ニュースレター 春(15)号、夏(16)号の発行予定

シリーズ「私と臨床教育学」の次回は小谷正登さんです。今までにこのシリーズで掲載した内容が、機関誌『臨床教育学論集』の14号から随時掲載されていく予定です。



シリーズ：私と臨床教育学⑫

私と臨床教育学

岩崎 久志

私は臨床教育学研究科の2期生で、阪神淡路大震災が発生して程ない1995年4月に入学した。社会学部を卒業し、出版社や書店などで社会人生活を経たのち、自由生活(フリーター)を謳歌、いや余儀なくされることとなった。そんな自分が、そろそろ社会復帰せねばと一念発起したのが、社会人大学院での学び直しだった。当時は漠然と、これからカウンセラーみたいなことがしたいと考えていたように思う。

もともと、対人援助の分野とはまったく無縁だった私が、はじめて臨床的な実践にかかわったのは、震災後に建てられた神戸市六甲アイランドの仮設住宅での心のケア・ボランティアだった。夏の暑い頃、同期の院生たちと住民の方を訪ねた日のことは今も鮮明に憶えている。

M1が終わる頃、まだ呼称として定着していなかった「ひきこもり」の青年層を支援する民間相談機関の非常勤相談員に就いた。しかし、2期生が修士課程を修了すると同時に博士後期課程が開設され、私は博士課程1期生としてそのまま学び続けることとなった。指導教授は修士課程に引き続き白石大介先生である。博士論文のタイトルは「教育臨床への学校ソーシャルワーク導入に関する研究」。

博士課程への進学とともに再び無職となっていた私は、先年ご逝去された小林剛先生からの紹介で、その年の秋にN市教育センターの教育相談員(カウンセラー)として年次雇用で採用されることになる。そこでは保護者へのカウンセリングに加えて、子どもへのプレイセラピーや学校との連携のあり方を実地に学ぶことができた。

結局、そこでの実践が臨床心理士の受験要件(当時)の実務経験として認定されて、資格を取得することにもつながった。ありがたいことである。

それから約四半世紀が経つ。現在の本務校に勤めてからもこの春で22年目を迎える。この間、大学では主に社会福祉士の養成に携わりながら、臨床的なかわりとして、スクールカウンセラー、企業でのカウンセリング、いのちの電話の研修委員等々と、貴重な経験を積むことができた。

振り返ると、私はとても恵まれていると思う。対人援助者として何の実績もない素人がここまでやってこられたのは、「運と縁」という言葉ではとても片づけられない。臨床教育学研究科の恩師や同窓の方々をはじめとする、たくさんの支えがあったからである。

さて、私と臨床教育学である。ここまでの自身の体験は割とすらすら語れるのに、臨床教育学とは何ぞや、という肝心なところが未だはっきりしない。学術的な定義とは別に、自分にはまだまだ得体のしれないものだ。臨床教育学の学位をいただいた者として、それを明らかにしていくことが、私にとってのやり残した課題なのだろう、きっと。

訃 報

4月25日、武庫川臨床教育学会副会長、石井邦也さんがご逝去されました。石井さんは、2017年より3期にわたり副会長として本学会を牽引していただきました。とりわけ「自主ゼミ」の中心メンバーとして活躍され、毎月の研究会でのやさしく且つ鋭い発言は、私たちに大きな刺激を与えました。石井さんは1944年上海で生まれられ、関西学院大学理学部、大阪市立大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程中退後、大阪府内の養護学校、高等学校で理科の先生として活躍。退職後も聖和保育園理事、子どもの居場所 Yu-Ya で保育や子ども支援に取り組みされました。同時に、2004年から武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科修士課程で学ばれ、本学会での活動に取り組まれています。敬虔なキリスト教徒であり、若いときから日曜学校の校長もされていました。4月19日、入院治療先の病院から電話をいただき、「ありがとう。ありがとう」と繰り返されたのが最期の言葉となりました。心より冥福をお祈りするとともに、天国から「心のオンライン」で私たちの活動に力添えいただくことを楽しみにしています。(上田孝俊)

5月7日理事会決定事項

1. 故・石井邦也副会長の在任期間（2022年8月末まで）、中村又一理事を副会長とすることを決定しました。
2. 6月の自主ゼミは、「石井さんを偲ぶ集い」を兼ねて開催します。みなさんが石井さんから伝えられたことを交流し合いましょう。飛び入り大歓迎。
3. 7月に花園大学の教員・保育士養成についてフィールドワークをおこないます。

※上記の行事は日時・内容が決定次第、学会ホームページでご案内いたします。



2019年3月、現役の院生らといっしょに台湾・東華大学を訪問した。太魯閣峡谷でのショット。ここで石井さんは石を採取し、持ち帰ろうとされた。幸い台湾出国時は発見されなかったようだが、閑空でアウト。理科の先生だったよねと改めて感じさせられた。同時にその無謀なくらみに、少年心をいつまでも持ち備えておられる「若さ」「探究心」も感じた。こんな思い出を書いてしまい、石井さん、ごめんなさい。

編集後記 2月に開催した大会は急遽、完全オンライン大会になりましたが、みなさんの協力で無事終了することができました。あらためて感謝です。ZOOMなどのオンライン研究会・会議が当たり前になってきました。機械による便利な面は活かしつつ、対面（リアル）での会議、まさに臨床現場の語り、聞きあいをより大事にしたいと思えます。コロナ禍がしばらくは続くので今後も留意してとりくみたいですね。一方で、ロシアのウクライナ侵略に胸がいたみます。独裁者プーチンの蛮行に対する怒りと情報操作の恐ろしさを痛感します。21世紀におこった戦争の事実を臨床教育学の立場からどう考えるのか、子ども・青年・大人の声を丁寧に聴きとり深めていきたいと思えます。〈文責：吉益〉